

内藤廣氏 講演概要

8月29日、鎌倉商工会議所ホールにおいて、2026年度第2回公開セミナーとして、多摩美術大学学長、内藤廣氏の講演をお聴きしました。最初に自己紹介として、建築家として40年やってこられたご自身の作品をスライドで見せていただき、その後、本日のテーマ「美大で何が起きているか」についてお話しいただきました。

まず、多摩美術大学のモットー「Freedom & Will」が紹介され、世界の大国を中心に自由が損なわれていること、それを阻止するためには闘いが必要であること、そしてWill＝「意力」は心の内側から出てくるエネルギーであり、生成AIや、近い将来社会に大きな変化をもたらすであろう量子コンピュータが、人間の意志の力をそいでいくことが予想され、ここでも闘いが必要であると話されました。

そしてそれは東大の藤井輝夫現総長の問題意識と繋がっており、2027年秋に新設予定のCollege of Designに具現化されているとのこと。今までの東大に欠けていたもの、それは社会全体をしっかり捉え、そのうえで未来をクリエイティブにデザインする力を養成することだったのではないかということです。

さらに、最近感銘を受けたエピソードとして、二人の女子学生の話がされました。彼女たちは演劇舞踊学科の学生で、志望動機を尋ねたところ、自分の中の息苦しさや違和感を身体にたち戻って考えたいと思い、入学したそうです。それは若者たちのセンサーがくっていないことの証しであり、内藤氏はそこに希望を見出したのですが、ただ、彼らの邪魔をしているのが我々大人ではないかとも反省されています。

そして、話題は戦後の日本の建築やデザインに大きな影響を与えたバウハウスの話に移りました。バウハウスは1919年ドイツのヴァイマールで設立され、モダニズムの枠組みを確立した美術学校と言われています。初代校長はヴァルター・グロピウスでモダニズムの建築家です。ただ、バウハウスにはもう一人忘れてはならない人物、オスカー・シュレンマーがおり、独自の視点で人間の身体に注目し、特異なバレエ作品を残しています。つまり、モダンデザインの根っこには身体表現が組み込まれているのですが、日本はデザインだけを持ち帰ったということです。

内藤氏は社会に於ける美大の役割は「炭坑のカナリヤ」だと言います。すなわち、社会が陥っている危機をいち早く感知し、警鐘を鳴らす役割が美大にはあると考えておられるのです。その関係で、先端的な試みをしている教員二人に身体に重点をおいたパフォーマンスを企画してもらったり、台湾の大学で感銘を受けた音楽と身体をコラボさせる試みを取り入れたりしているそうです。

これから社会は激変するかもしれません。ただ、社会が揺れ動いているほうが、優れた才能が現れるものです。多摩美大で言えば、1970年前後はひどく荒れていましたが、その時代に三宅一生や、もの派と呼ばれる日本美術界の大きなムーブメントが起こり、それを支えたのは多摩美大の出身者たちでした。

現在の多摩美術大学にも多くの若者が自分の中からわき出てくるものを表現しようと頑張っています。そういう彼らに内藤氏は希望を抱き、また、彼らをサポートする道を探っていきたいと考えておられます。